

子育て世代の健康な生を支える学 —親になるプロセスを支える学の構築—

健康科学部 看護学科 藤田藍津子 / 健康科学部 看護学科 玄番千恵巳 / 健康科学部 看護学科 今留 忍
人文学部 教育福祉学科 田中恵美子

背景および目的

子育て世代をめぐる社会は複雑化し、虐待、子育ての孤立等が社会的な問題として、取り上げられており、育児ストレスが高い場合は虐待につながるなどの報告もある。

本研究の目的は、東京家政大学狭山校舎の所在地である人口約15万人（年少人口約11.5%）の製造業の盛んな狭山市在住の子育て世代を対象として、安心して育児に向き合うことが出来るよう、親と子の両面から支援を行う。

狭山校舎には、看護学科、リハビリテーション学科、子ども支援学科、放課後等デイサービス（つくし）があり、保健師、助産師、看護師、障害のある子どもや親を支援する専門家等を有しており、妊娠期から児の誕生にかけて切れ目なく、支援のできるメソッドがある。様々なニーズを持つ親と子を対象に、社会とのつながりが変化する中での親子の場所づくり、離乳食や幼児食などの具体的な育児方法の提案、子育て中の親子のストレスの緩和につながるリラクゼーション法など、家政大メソッドとして提案する。教職員、在学生、地域住民が一体となって実践し、その効果を検証する点が特色である。

方法

インタビュー調査協力のチラシを配付し、同意の得られた本大学の子育て支援施設、養護施設の保護者13名に半構造化面接を用いて、インタビュー調査を実施した。インタビューの内容は、子育てへの思い、子育てのやりがい・困難感、子育ての工夫、本大学の施設を選んだ理由、今後、期待する支援やサービス等とした。

結果

協力者は全て母親であった。インタビュー時間は、32分～65分、子どもの年齢は生後6ヶ月から13歳であった。

語られた内容は、子どもの友人関係や人間関係、集団生活、利用している資源、子どもが病気の時の預け先、子どもの将来について、家族関係についてであり、子育てへの不安、心配なことが非常に多かった。また、12名が、子育てを理由に働き方を変え、退職もしていた。しかし、不安や心配なことがある中でも、自ら解決方法を見つけ、子育て、子どもが成長していくことについて、前向きにとらえている母親も多かった。

以下はインタビューの一部である。

・この状態に満足して子育てをしています。県から育児チケットみたいなのをもらって、それを使って、助産師のケアを受けられるのがあって、利用しました。

・あと臨床心理士さんから聞いた「子どもの心理っていうのはこういう感じで、そういうときは、お母さんは大体こういうふうになる」と。「そういうときはもう諦めてください」みたいな。「もうどうしようもないから、もうそういうときはお母さんも一緒に泣くんでいいです」みたいな。なんかそういうので、私は専門家から聞いた方が納得するタイプだからすっきりして、また辛くなったら利用しています。

本大学の施設を利用する理由として、大学の中にある施設のため、教育的役割を期待していた。今後、期待する支援やサービスでは、親子が自由に語れる居場所のようなものから、具体的な、子どもとの関わりかた、子どもと体験できるものといった内容であった。さらに、母親自身が身体のケアをできるような支援を望むといった発言もあった。

考察

乳児期の子を持つ場合、子どもの成長や母親の身体面が多く、幼児期では集団生活への適応、子ども同士の人間関係、小学校に関する内容が多かった。子どもが学童期になると、友人関係、地域との関係、学習に関する内容が多かったことから、母親たちの育児への不安や困難感は、子どもの年齢とともに変化しているといえる。また、母親たちは、子どもの成長に応じて、自らの身体への関心から、子どもと社会との関係性へと広がりがみられていると考える。

今後は、本大学の特性を生かし、様々なニーズを持つ親と子を対象に、社会とのつながりが変化に応じた支援を提案していくことが必要である。

今後の展望

